

地域の課題を外国に伝える ESD としての総合学習の効果

— 社会参加の意識の高まりに着目して —

永田 成文*

The effect of reporting the regional issues to a foreign country in integrated study as education for sustainable development : from a viewpoint to enhance the awareness of social participation

Shigefumi NAGATA

要 旨

本研究では、身近な地域の問題を取り扱うことが多い小学校において、地域の様々な問題の現状や課題について思考・判断したことを表現する3カ年の総合学習を核とした授業プログラムを開発し、社会参加の意識が高まったのかについて、アンケート調査や地域の課題を伝える内容から分析し、授業プログラムの有効性を検討した。

アンケート結果から、地域の課題について、思考・判断・表現したことについて外国を意識して発信することで、学習者は自分とのつながりから社会に働きかける側面と他地域とのつながりから他者と交流する意識が高まり、社会参加の意識を高めていることが分かった。抽出児の伝える内容から、地域の課題を解決するための呼びかけを行い、他者を意識してわかりやすく伝えようとしており、3カ年を通して、学習者が自分とのつながりや他地域とのつながりをとらえ、社会参加の意識が高まっていったことがわかった。

提案した地域の課題を外国に伝える総合学習を核とした授業プログラムは、学習者の社会参加の意識を高めており、ESDの究極目標である行動の変革を促すことにつながる。

キーワード：ESD、総合学習、発信、地域の課題、社会参加

1. ESD としての総合学習の必要性

現代世界は、経済の発展や人間活動の変化などによる自然環境に対する開発が進み、良好な生活環境の維持が難しくなっている。また、グローバル化の進展により、国内外で諸外国の人々とコミュニケーションを行う機会が増加するなど、世界の国々・地域の相互依存関係が強くなり、国家間や人々の交流による文化摩擦¹⁾が生じている。自然環境や社会環境を将来も良好な状態で維持していくために、学校教育において、異文化理解や地球的課題などの現代世界の諸課題の解決に向けて行動できる人材の育成が求められている。

2008年版の小・中・高等学校の学習指導要領では主として社会系教科において、「持続可能な社会の実現」や「持続可能な社会の構築」等の用語で持続可能な開発のための教育 (Education for Sustainable Development:

ESD) の視点が盛り込まれた²⁾。現状では、従来の教科等における内容・方法との違いが明確にされておらず、ESDが進展しているとは言い難い。ESDは、そのテーマが教科の内容を横断し、問題解決能力を育成する学習過程を重視し、学習者の行動の変革を促すことを究極目標としているため、教科学習ばかりでなく、総合的な学習の時間 (以降「総合学習」と表記) や特別活動においても実践が期待されている。

2008年版学習指導要領の小学校の総合学習では、地域の課題の内容が付け加えられ、改訂の要点として、問題の解決や探究活動の過程で、体験活動を位置づけ、言語により分析し、まとめ、表現する活動が重視された。また、「探究的な学習」という言葉で、汎用的能力を育成し、横断的・総合的問題を扱う総合学習の特徴が示された³⁾。配慮事項として、各教科、道徳、外国語活動及び特別活動で身に付けた知識や技能を関連付

*三重大学教育学部

け、学習や生活に生かすとされている。

総合学習は仲間や地域の人などと協同的に取り組む学習活動として展開され、言語を使用してのコミュニケーションが、文脈性のある活動において必然性を持って展開される⁴⁾。グローバル化する国際社会に主体的に生きるためには、単に言葉で伝えるコミュニケーションではなく、自己と異質な他者との間を繋ぐ相互作用である異文化コミュニケーション能力⁵⁾が必要となる。また、総合学習の内容は小学校高学年に導入された外国語活動の内容を包含しており、連携が可能である。

本研究は、身近な地域の問題を取り扱い、自分とのつながりから考えることが多い小学校において、総合学習のテーマで思考・判断したことを表現するESD授業を構想する。ESD授業では、その究極目標である行動の変革を促しているのかという検証は殆どなされていない⁶⁾。本研究の目的は、地域の課題について思考・判断したことをコミュニケーションにより表現するESDとしての総合学習を開発し、それが行動の変革を促すことに貢献しているのかを実証的に検証することである。

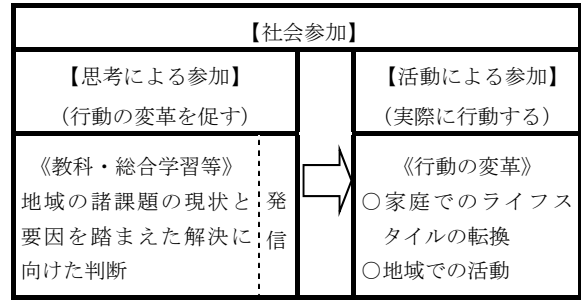
2. 社会参加の意識を高める総合学習

2.1 目標論

わが国における「国連持続可能な開発のための教育の10年」実施計画(2006)では、ESDの目的を、「知識を網羅的に得ることだけでなく、『地球的視野で考え、様々な課題を自らの問題としてとらえ、身近なところから取り組み、持続可能な社会づくりの担い手となる』よう個人を育成し、意識と行動を変革する」としている。これは総合学習の目的「問題の解決に取り組む態度を育て、自己の生き方を考える」と関連し、社会科の究極目標である公民的資質の育成とも趣旨が合致する。

小原(2009)は、社会科が求める思考力・判断力・表現力を、「知る・わかるだけでなく、その背景を熟考し、自分なりの意見や考えを持ち、それを表現しながら社会への参加・参画を考える力」と定義した。永田(2013)は、社会参加について、諸課題の解決に向けて思考・判断・表現する思考による参加と社会への直接的な活動による参加から構成され、思考による参加では思考・判断・表現したことを発信することを示した(第1図)。

思考力は社会がわかるための追究を行い、判断力は社会を構築するための対応を考え、表現力はそれらを言語や文章でまとめ、さらに外部に発信することで育成されると考える。思考による社会参加は、学習者の意識と行動の変革につながる。



※永田(2013, p.113)を一部変更して作成

第1図 社会参加の構成

地域の課題について思考・判断・表現するESDとしての総合学習の授業では、教科等と連携して、社会参加の意識を高めることを目指すことになる。

2.2 内容論

ユネスコのESD国際実施計画フレームワーク(2004)では、社会・文化、環境、経済の3領域と15の重点分野を示した(第1表)。

社会参加の意識を高めるESDとしての総合学習の授業では、持続性が危ぶまれている世界規模で表出する現代世界の諸課題を考察する。ユネスコが示した重点分野から、学習者とのつながりがある課題を設定し、それらの背景や対応について思考・判断・表現を行う。重点分野は、総合学習の内容として学習指導要領に示されている「国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題」の中で、特に国際理解や環境と関連している。

設定したテーマについて、地域の現状や課題を認識し、持続可能な開発にかかわる世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会等の価値⁷⁾を踏まえ、持続可能な社会の形成を見据えて諸課題の解決策を判断することで、社会参加の意識を高めていく。

第1表 ESDの3大領域及び15重点分野

| (1) 社会・文化領域 | | |
|-------------------------|-----------------|--------|
| ①人権 | ②平和と人間の安全保障 | ③男女平等 |
| ④文化の多様性と異文化理解 | ⑤健康(保健・衛生意識の向上) | ⑥エイズ予防 |
| | | ⑦統治能力 |
| (2) 環境領域 | | |
| ⑧自然資源(水、エネルギー、農業、生物多様性) | | |
| ⑨気候変動 | ⑩農村構造改革 | |
| ⑪持続可能な都市化 | ⑫災害防止と被害軽減 | |
| (3) 経済領域 | | |
| ⑬貧困削減 | ⑭企業責任と説明義務 | |
| ⑮市場経済の再考 | | |

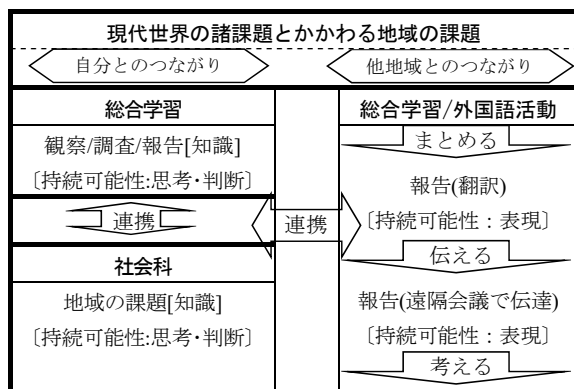
※UNESCO(2004, pp.17-20)をもとに作成

2.3 方法論

社会参加の意識を高める ESD としての総合学習の授業では、地域と関わる現代世界の諸課題の解決に向けて、思考・判断・表現したことを発信する過程で異文化コミュニケーションにより外国に伝える活動を導入する。学習者が自分とのつながりのある地域の課題の特色や解決策を意識し、それらをまとめて伝える発信により他地域とのつながりを意識することで、より社会参加の意識を高めることが期待できる。

小学校の国際理解の先行プログラムで、学習成果を遠隔会議で諸外国の児童に伝える活動は取り入れられている⁸⁾。しかし、特別なプログラムとして特定の児童が交流するイベント的なものが多く、クラスや学年全体の学びとなっていないこと、児童の発達段階を位置づいていないことが課題である。永田(2011)の先行プログラムでは、高学年の外国語活動を想定して、日本の文化を遠隔会議で伝える国際理解の領域の総合学習を提案している。しかし、外国の児童に伝えたいことを十分に考える時間が不足し、学習者は地域の課題そのものを伝えるより英語で伝える意識が強くなった。

総合学習と社会科等の教科が連携して、地域の課題についての認識を深め、地域の持続可能性の視点から思考・判断することで自分とのつながりをとらえる。さらに総合学習で伝えたい内容を十分に吟味し、外国語活動で伝えたい内容を翻訳して外国に発信することで、身近な地域や日本とは異なる外国を意識し、他地域とのつながりをとらえる。総合学習を核として、社会科と外国語活動との連携により、テーマに関わる地域の現状や課題を改めて認識し、それを解決していこうとする活動や、自己の考えを取捨選択して日本語で表現し、それを異文化コミュニケーションとして発信することを通して地域の課題を問い直すことで、学習者の社会参加の意識を高めていく(第2図)。



※筆者作成

第2図 社会参加の意識を高める教育活動の連携

3. 総合学習を核とした ESD プログラム

3.1 系統的な ESD プログラム

本研究では小学校教員と大学教員が協同して、学習者が地域の課題を認識し、思考・判断したことをわかりやすくまとめ、翻訳し、異文化コミュニケーションを駆使して遠隔会議で学習成果を発信する活動を位置づけた、総合学習を核とした ESD プログラムを系統的に開発した。

2013年(第4学年)に、主に身近な地域における環境保全の取り組みについて、2014年(第5学年)に、主に日本の自然災害の特色と防災の取り組みについて、2015年(第6学年)に主に身近な地域の環境の変化をテーマとして、地域の課題を外国に伝える活動を ESD プログラムに位置づけた。同じ児童集団が3カ年、環境領域の ESD 分野⁹⁾の「自然資源」と「3R 運動の推進」、「防災・減災」、「持続可能な都市化」にかかわるテーマについての学習成果を発信した。

3カ年のプログラムでは、津市立北立誠小学校とオーストラリア NSW 州のシドニー郊外にある Coogee public school (以降「クージー小学校」と表記)が、それぞれの学習成果をグループ単位で遠隔会議により伝え合った。北立誠小学校の児童は、総合学習のテーマについて、外国語活動の一環として、2013年は簡単な英文と日本語の併用、2014年は簡単な英文、2015年は複数の英文の組み合わせで発信し、学年が上がるごとにコミュニケーションのスキルを高めていった。

3.2 単元「地域の環境保全を伝えよう」

2013年に津市立北立誠小学校第4学年2クラス(45名)とクージー小学校の第3学年1クラス(27名)で遠隔会議を行った(第2表)。

5月から9月にかけて、第4学年の担任が、総合学習で「地域の環境保全の調査」を行い、大学教員が社会科の特設授業として、地球温暖化やクージー小学校の発表テーマであるオーストラリアのアボリジニアルの実情を伝え、児童の身近な地域にある三重大学の再生可能エネルギー施設の見学を設定した。

学年で、地球温暖化、川の水質、ごみの分別、リデュース、リユース、リサイクルの6グループに分け、伝えたい内容を考えた。大学教員が外国語活動の支援を行い、児童は簡単な英文と日本語で伝える練習を重ねた。身近な地域の課題について、児童は主にパワーポイント資料を活用して、各グループでクージー小学校に発信した。

第2表 単元の内容と位置付け(2013年度)

| 時数 | 総合学習を核とした内容 | 位置付け |
|----------------|--|--|
| 5～9月 (39h) | [地域の環境保全調査](39) ○◎ゴミ収集車・3R(10) ○◎学校のゴミ・3R(12) ○ペットボトルタワー作成(4) ○◎3Rのまとめ(1) ○水・水質チェック(4) ○風車づくり(4) ○◎自然エネルギー(4) | 各グループの身近な地域とかかわる調査・まとめ ※社会科ゴミ・電気の学習と連携 |
| 9～11月 (11h) | [遠隔会議に向けて](9) ◎地球温暖化と北極(1) [2013.9.17] ◎三重大学自家発電の見学(2) [2013.10.24] ----- ○テーマ決め(1) ○セリフわけ(1) (第1回アンケート実施) ◎アボリジナルとは(1) [2013.10.31] ○日本語で発表練習(1) □英語コミュニケーション指導(1) [2013.11.14] □英語単文の発表練習(1) | 地球環境と身近な地域の再生可能エネルギー(社会科) 外国の児童に伝える表現を考え、英語に翻訳し、資料と英語で発表練習(外国語活動) |
| 11月 (2h) | □外国へ伝える遠隔会議(2) [2013.11.21(木)]10:10-11:10 あいさつ/スタッフ紹介:5 Coogee「先住民関連地保護」:15 質疑応答(北立誠から) 北立誠「地域の環境保全」:20 質疑応答(Coogeeから) 日本語「学校の環境保全」:10 フリートーク:10 (第2回アンケート実施) | 遠隔会議で外国の児童に伝えたいことを英語でわかりやすく伝える(外国語活動) |

※○は小学校の総合学習における探究、◎は社会科と連携した内容、□は総合学習(外国語活動)と連携した内容、下線は大学と小学校の連携、()は時間数を示す。筆者作成

遠隔会議では、クージー小学校の児童がアボリジナルに関連する土地の保護について英語で伝え(通訳が日本語に変換)、続いて北立誠小学校の児童が地域の環境保全について英語と日本語(通訳が英語に変換)で伝え、クージー小学校の日本語クラス¹⁰⁾の児童が日本語で学校の環境保全活動について発表した。

3.3 単元「日本の災害を伝えよう」

2014年に津市立北立誠小学校第5学年2クラス(45名)とクージー小学校第3・4学年1クラス(28名)の児童で遠隔会議を行った(第3表)。

5月から7月にかけて、第5学年の担任が、総合学習において、「日本の災害の調査」を実施し、大学教員が社会科の特設授業として、日本の災害の特色と地域がどのように変わってきたのか、身近な地域の土地利用によってどのような災害が起こりやすいかを扱った。

第3表 単元の内容と位置付け(2014年度)

| 時数 | 総合学習を核とした内容 | 位置付け |
|---------------|---|---|
| 5～7月 (16h) | [日本の災害調査](16) ○洪水・水害 ○地震 ○竜巻・雷 ○台風 ○火災 ○防災・避難対策 ○まとめ(模造紙)・発表 | 各グループの日本の災害の調査・まとめ |
| 11月 (11h) | (第1回アンケート実施) [遠隔会議に向けて](9) ◎日本の災害と地域の改変(1) [2014.11.4] ◎学校付近の土地利用と災害(1) [2014.11.7] ○グループ分け・日本語原稿作成・発表練習(2) □英語翻訳指導(1)[2014.11.14] 発表原稿の英訳(各クラス) □英語原稿の発表練習(1) □英語コミュニケーション指導(1) [2014.11.20]プレゼン練習 □英語原稿の発表練習(2) | 日本の災害と身近な地域の土地利用と災害(社会科) 外国の児童に伝える表現を考え、英語に翻訳し、資料と英語で発表練習(外国語活動) |
| 11月 (2h) | □外国へ伝える遠隔会議(2) [2014.11.28(金)]10:00-11:00 あいさつ/スタッフ紹介:5 北立誠「日本の災害と防災」:20 質疑応答(Coogeeから) Coogee「地域の未来の公園利用」:20 質疑応答(北立誠から) 日本語「自己紹介や好きなもの」:10 (第2回アンケート実施) | 遠隔会議で外国の児童に伝えたいことを英語でわかりやすく伝える(外国語活動) |

※○は小学校の総合学習における探究、◎は社会科と連携した内容、□は総合学習(外国語活動)と連携した内容、下線は大学と小学校の連携、()は時間数を示す。筆者作成

1組は、①「洪水・水害:水害の様子やダムや堤防」、②「地震:地震の様子と荷物」、③「竜巻:竜巻の様子と避難の態勢」、④「雷:雷の様子と避難場所」、⑤「火災:火災の様子と避難の様子」⑥「台風:台風の様子と避難の様子」、2組は、①「東南海地震の場所」、②「東南海地震の被害予想」、③「非常食」、④「防災グッズ」、⑤「学校の災害対策」、⑥「避難場所・経路」について、伝えたい内容を考えて。児童は大学教員の支援を受けて英訳し、英文で伝える練習を行った。日本の課題について、主にパワーポイント資料を活用して、各グループで伝えたいことを英語で発信した。

遠隔会議では、北立誠小学校の児童が日本の災害と防災について英語で伝え、クージー小学校の児童が地域の未来の公園利用について英語で伝え、日本語クラスの児童が自己紹介や自分が好きなものについて発表した。

3.4 単元「地域の環境変化を伝えよう」

2015年に津市立北立誠小学校第6学年2クラスと(46名)とクージー小学校第6学年の1クラス(30名)

の児童で遠隔会議を行った（第4表）。

6月から10月にかけて、第6学年の担任が、総合学習で「身近な地域の環境変化の調査」と行い、大学教員が川の風景の変化や道の変化や地域のまちづくりという社会科の特設授業を行った。

学年で、伊勢街道、伊勢神宮、大名行列、藤堂高虎、伊勢電気鉄道、倉紡の6グループに分かれ、伝える内容を考えた。児童は大学教員の支援を受けて英訳し、英文で伝える練習を行った。身近な地域の環境変化について、パワーポイント資料と小道具を使ってわかりやすく伝えようとした。

遠隔会議では、日本語クラスが趣味や習字を披露し、北立誠小学校の児童が身近な地域の環境変化について英語で伝え、クージー小学校の児童がオーストラリアの様々な地域を紹介した。

第4表 単元の内容と位置付け(2015年度)

| 時数 | 総合学習を核とした内容 | 位置付け |
|--------------------|--|---|
| 6～ 10月 (11h) | [身近な地域の環境変化調査](9) ○伊勢神宮 ○伊勢街道 ○倉敷紡績(見学) ○藤堂高虎(講演) ○伊勢電気鉄道 ○大名行列 [発表小物作り](2) | 各グループの地域の社会環境の調査・まとめ、小物製作 |
| 7～ 10月 (11h) | 〈第1回アンケート実施〉 [遠隔会議に向けて](9) ◎橋に関わる川の風景(1) [2015.9.14] ◎伊勢街道と橋(1) [2015.9.17] ○グループ分け・日本語原稿作成・発表練習(2) □英語原稿の発表練習(2) □英語翻訳指導(1)[2015.10.8] 発表原稿の英訳改善(各クラス) □英語原稿の発表練習(1) □英語コミュニケーション指導(1) [2015.10.16]プレゼン練習 | 歌の歌詞や歴史からとらえる身近な地域の環境変化(社会科) 外国の児童に伝える表現を考え、英語に翻訳し、資料と英語で発表練習(外国語活動) |
| 10月 (2h) | □外国へ伝える遠隔会議(2) [2015.10.22(木)] 9:10-10:10 あいさつ/スタッフ紹介:5 日本語「趣味や習字披露」:10 北立誠「身近な地域の環境変化」:20 質疑応答(Coogeeから) Coogee「豪の様々な地域」:20 質疑応答(北立誠から) あいさつ:5 〈第2回アンケート実施〉 | 遠隔会議で外国の児童に伝えたいことを英語でわかりやすく伝える(外国語活動) |

※○は小学校の総合学習における探究、◎は社会科と連携した内容、□は総合学習(外国語活動)と連携した内容、下線は大学と小学校の連携、()は時間数を示す。筆者作成

4. 地域の課題を外国に伝える効果

4.1 アンケートによる分析

各年の地域の課題を外国に伝える活動を活用したESDプログラムの効果を分析するために、遠隔会議に向けた活動が始まる前と、遠隔会議直後にとったアンケートからみていく。次に分析対象としたアンケート項目を示す¹¹⁾。

| |
|---------------------------|
| 〈自分とのつながりにかかわる項目〉 |
| [認識] |
| 1. 地域のことをよくわかっている |
| [責任] |
| 2. 地域のことをふだんから考えている |
| [行動] |
| 3. 地域をよくする活動に参加したい |
| 〈他地域とのつながりにかかわる項目〉 |
| [会話] |
| 4. 地域のことについて外国の友達と話したい |
| [伝達] |
| 5. 地域のことを外国の友達に伝えることができる |
| [交流] |
| 6. 地域のことを外国の友達からも学ぶことができる |

それぞれ、a.強く(とても)思う、b.少し思う、c.あまり思わない、d.まったく思わないから選択させ、この順に4、3、2、1の数値をあてはめた。対象となる児童¹²⁾の平均値とt-検定の結果を示したものが第5表、第6表、第7表である。

2013年は、1回目と2回目で、主にテーマの思考・判断・表現による自分とのつながりとかかわる認識・責任・行動、発信という異文化コミュニケーションによる他地域とのつながりとかかわる会話・伝達・交流の項目の全てにおいて平均値が高くなった。項目5は第1回と第2回のアンケートの前後で0.5%水準の有意差がみられ($t(40) = 2.677; p < .05$)、伝達の意識が高まった。

2014年は、1回目と2回目で、2013年と同様に平均値は全て高くなり、項目1は0.5%水準の有意差($t(44) = 2.666; p < .05$)、項目2は0.5%水準の有意差($t(44) = 2.121; p < .05$)、項目3は0.1%水準の有意差($t(44) = 3.272; p < .01$)、項目4は0.5%水準の有意差($t(44) = 2.292; p < .01$)、項目5は0.01%水準の有意差($t(44) = 4.627; p < .001$)がみられ、認識、責任、行動、会話、伝達の意識が高まった。

2015年は、1回目と2回目で、同様に平均値は全て高くなり、項目2は0.1%水準の有意差($t(42) = 3.334; p < .01$)、項目3は0.1%水準の有意差($t(42) = 2.886; p < .01$)、項目4は0.5%水準の有意差($t(42) = 2.675; p < .05$)、項目5は0.5%水準の有意差($t(42) = 2.235; p < .05$)がみられ、責任、行動、会話、伝達の意識が高まった。

第5表 伝える活動前後のアンケート結果(2013)

| | 項目 | 値 | 1回目 | 2回目 | t-検定 |
|-----|------|----|------|------|--------|
| 自分 | 1 認識 | 合計 | 120 | 124 | -0.942 |
| | | 平均 | 2.93 | 3.02 | n.s. |
| | 2 責任 | 合計 | 108 | 120 | -1.863 |
| | | 平均 | 2.63 | 2.93 | n.s. |
| | 3 行動 | 合計 | 130 | 136 | -1.030 |
| | | 平均 | 3.17 | 3.32 | n.s. |
| 他地域 | 4 会話 | 合計 | 134 | 140 | -1.232 |
| | | 平均 | 3.27 | 3.41 | n.s. |
| | 5 伝達 | 合計 | 115 | 133 | -2.677 |
| | | 平均 | 2.80 | 3.24 | p<.05 |
| | 6 交流 | 合計 | 132 | 134 | -0.361 |
| | | 平均 | 3.22 | 3.27 | n.s. |

※1回目と2回目に記述した41名の児童を対象。筆者作成

第6表 伝える活動前後のアンケート結果(2014)

| | 項目 | 値 | 1回目 | 2回目 | t-検定 |
|-----|------|----|------|------|--------|
| 自分 | 1 認識 | 合計 | 116 | 129 | -2.666 |
| | | 平均 | 2.58 | 2.87 | p<.05 |
| | 2 責任 | 合計 | 109 | 120 | -2.121 |
| | | 平均 | 2.42 | 2.67 | p<.05 |
| | 3 行動 | 合計 | 123 | 142 | -3.272 |
| | | 平均 | 2.73 | 3.16 | p<.01 |
| 他地域 | 4 会話 | 合計 | 127 | 139 | -2.292 |
| | | 平均 | 2.82 | 3.09 | p<.05 |
| | 5 伝達 | 合計 | 117 | 135 | -4.627 |
| | | 平均 | 2.60 | 3.00 | p<.001 |
| | 6 交流 | 合計 | 132 | 141 | -1.593 |
| | | 平均 | 2.93 | 3.13 | n.s. |

※1回目と2回目に記述した45名の児童を対象。筆者作成

第7表 伝える活動前後のアンケート結果(2015)

| | 項目 | 値 | 1回目 | 2回目 | t-検定 |
|-----|------|----|------|------|--------|
| 自分 | 1 認識 | 合計 | 120 | 126 | -1.634 |
| | | 平均 | 2.79 | 2.93 | n.s. |
| | 2 責任 | 合計 | 116 | 128 | -3.334 |
| | | 平均 | 2.70 | 2.98 | p<.01 |
| | 3 行動 | 合計 | 128 | 139 | -2.886 |
| | | 平均 | 2.98 | 3.23 | p<.01 |
| 他地域 | 4 会話 | 合計 | 121 | 134 | -2.675 |
| | | 平均 | 2.81 | 3.12 | p<.05 |
| | 5 伝達 | 合計 | 124 | 132 | -2.235 |
| | | 平均 | 2.88 | 3.07 | p<.05 |
| | 6 交流 | 合計 | 130 | 134 | -1.071 |
| | | 平均 | 3.02 | 3.12 | n.s. |

※1回目と2回目に記述した43名の児童を対象。筆者作成

2013年で伝達、2014年で認識、責任、行動、会話、伝達、2015年で責任、行動、会話、伝達の意識が高まり、総合学習におけるテーマの探究後の遠隔会議に向けた活動において、児童は自分とのつながりと他地域とのつながりからテーマについての考察が深まった。外国に提案することが最終活動に設定されていたため、伝達は継続して意識されている。2013年の責任、行動、会話の平均値は、認識や交流よりも伸びており、第1回アンケートを遠隔会議に向けた活動の途中でとったこと、最初から児童の意識が高かったことなどから、その他の統計学上の有意差がみられなかったと考えられる。2014年と2015年の実践で行動の意識が高まったのは、思考・判断・表現したことを発信することで、日本の災害に対応したり、地域の環境変化に対応する必要性を感じたためであると推察される。2014年に認識の意識が唯一高まったのは、社会科の大学教員による特設授業が地域の災害に直接関連し、クージー小の発表が地域の課題への対応であったためと推察される。

アンケート調査から、児童は自分とのつながりから社会に働きかける側面と他地域とのつながりから他者と交流する意識が高まっており、社会参加の意識を高めることができたといえる。

4.2 伝えたい内容による分析

第8表は、抽出児童¹³⁾の所属するグループの各テーマにおいて外国に伝えた内容である。

A児は2013年に短文と日本語でリデュースにかかわる呼びかけを行い、2014年に東南海地震について英文でその地域の影響を伝え、2015年に藤堂高虎のつくった津城の仕組みを2つの英文で伝えている。所属するグループでも、各年度で地域の課題の解決に向けた呼びかけがみられる。B児は2013年に短文と日本語でリユースの呼びかけを行い、2014年に学校の防災対策として英文で学校が避難所となっていることを伝え、2015年に現存しない伊勢電気鉄道について、接続詞を使った英文でその貢献に関心をもつことを呼びかけている。所属するグループでも、各年度で地域の課題の解決に向けた呼びかけがみられる。

A児とB児は、地域の様子について自分の伝えたいことについて学年を経るごとにわかりやすく伝えようと工夫している。また、所属するグループの発表から、グループ全体で地域の様子をとりえ、課題の解決のために対策を提案したり、呼びかけを行っている。このように、グループ全体で、思考・判断・表現を行っていることがわかる。

記述内容から、年々、他地域とのつながりを意識して伝える力がつき、自分とのつながりから思考・判断・表現がなされ、社会参加の意識が高まっている。

第 8 表 対象児童の所属したグループの外国の児童に伝えたい内容

| | |
|---|---|
| A 児 の 所 属 し た グ ル ー プ | <p>2013年【リデュースグループ】 Reduce group [対応⇒呼びかけ]</p> <p>a : We learned “3R”. 私たちは「3R」という言葉も勉強しました。⇒〈We learned the word “3R”.〉 b : 3R are the initials. 3Rとは、リデュース、リユース、リサイクルの頭文字のRからできた言葉です。 ⇒〈3R are the initials of Reduce, Reuse and Recycle.〉 c : To reduce rubbish. リデュースはゴミがでないようにすることです。⇒〈Reduce means “to reduce rubbish”.〉 d : <u>Use your own shopping bag.</u> 例えば、買い物時のエコバッグを使うこと、(対応) ⇒〈For example, to use your own shopping is one example.〉 e : <u>Use your own chopsticks.</u> 食べるときにわりばしではなくマイ箸を使うことなどが挙げられます。(対応) ⇒〈To use your own chopsticks instead of disposable wooden ones is another example.〉 f : <u>This is our shopping bag.</u> これは私たちのマイ「エコバッグ」です。 ⇒〈This is our own shopping bag, called “Eco-bag”.〉 ☑ : <u>Reducing rubbish is good.</u> そもそもゴミを出さなければ環境のためになります。(呼びかけ) ⇒〈Reducing rubbish in the first place is good for environment.〉</p> |
| | <p>2014年【東南海地震グループ】 Tonankai earthquake group [現状⇒影響⇒呼びかけ]</p> <p>a : Tonankai earthquake is a big one. It will happen near our city and around Mie prefecture. Huge damages are expected. (現状・影響) b : If the earthquake is caused, a seismic intensity is expected to be 6-weak in our city. It is difficult for us to stand and wooden houses sometimes collapse. (影響) ☑ : The damages of the earthquake are <u>not only big shakes but also tsunami.</u> (影響) A tsunami is also a serious disaster. Many people are killed by tsunami. d : Therefore we don't know when a big earthquake such as Tonankai earthquake is happened. Please learn to <u>pay attention to an earthquake on your life.</u> (呼びかけ)</p> |
| | <p>2015年【藤堂高虎グループ】 Takatora Todo group [現状⇒影響⇒呼びかけ]</p> <p>a : Takatora Todo was a lord who lived in Tsu. b : He <u>built many famous castles</u> in Japan. (現状) c : This is an Armor and helmets which he wore. d : This picture is his castle in Tsu city. e : The castle is surrounded by many moats. ☑ : This is the inside of the castle. Stone walls are built by piling big stones. a : This is a character associated with him. e : Takatora Todo was one of the typical generals. Many people in Mie prefecture <u>are proud of him.</u> (影響) a : <u>We want many people to know about him through posters drawn by us.</u> (呼びかけ)</p> |
| B 児 の 所 属 し た グ ル ー プ | <p>2013年【リユースグループ】 Reuse group [対応⇒呼びかけ]</p> <p>a : To use things repeatedly. リユースは繰り返し使うことです。⇒〈Reuse means “to use things repeatedly”.〉 b : Flee market, used books stores and used clothe stores. フリーマーケットや古本屋、古着屋等もリユースと言えます。 ⇒〈Flee market, used book stores and used clothe stores are good examples of Reuse.〉 c : <u>We made a tower.</u> 私たちはリユースの一つとして、三重大学ISOの人達とペットボトルタワーを作りました。(対応) ⇒〈As one of Reuse, we made a tower of used plastic bottles with people in ISO, Mie University.〉 d : <u>We wrote our goal.</u> まず、<u>2Lペットボトルに「むだ使いをなくす」ような自分たちの環境目標を書きました。</u>(呼びかけ) ⇒〈First, we wrote our environmental goal, “Reduce the waste” in the plastic bottle of 2 liters.〉 e : We piled them. それを積み重ねていき、ライトアップもできるようにしました。 ⇒〈We piled them up and had a lighting-up.〉 ☑ : This is a picture. これがその時の写真です。⇒This is a picture of the time. The used plastic bottles <u>are beautiful.</u> ゴミになるはずのペットボトルがこんなにきれいな作品となりました。(呼びかけ) ⇒〈The used plastic bottles that should have been rubbish turned to be beautiful piece of work.〉</p> |
| | <p>2014年【学校の災害対策グループ】 School measures group [対応⇒呼びかけ]</p> <p>a : We <u>practice to escape</u> from disasters. (対策) b : There are <u>water and food for everyone</u> near classrooms. (対策) ☑ : Sometimes we escape to other buildings outside, and <u>this school is also used as a shelter.</u> (対策) d : We <u>wear helmets and watch the video about disasters.</u> (対策) a : There are many things we cannot introduce this time. b : <u>We want to make efforts for the disaster we don't know when to happen.</u> (呼びかけ)</p> |
| | <p>2015年【伊勢電気鉄道グループ】 Ise electric railroad group [現状⇒影響⇒呼びかけ]</p> <p>a : The train starting from Edobashi which we live in was running. The railway connects Ise Shrine and Nagoya. Now, <u>the railway was discontinued.</u> It is <u>used by many people as a road.</u> The railway had a big curve. (現状) b : The present way <u>reused by the railway also has a big curve.</u> (影響) The picture is the past Edobashi station. It was the starting Station. c : The train has been running near our school. This picture is the past Tsu station. d : Stagecoach stops at the station to carry goods. This picture is the Tsu station of that time and the present. e : There are two pictures. The first one is a platform in past Tsu station. The second one is the remains of a platform. This picture is the past Tue station. ☑ : At the time, trains were running along the seashore. There was a station located in Yuki shrine. The shrine is famous for ume blossoms. g : Soldiers left Yokkaichi station for the front during the war. This is an iron bridge. It is used by many people as a road now. ☑ : <u>Because there are few things which remain about the Ise electric railroad, we hope many young people get interested in it.</u> (呼びかけ) c : <u>When we get on Kintetsu Line, we want to remember the Ise electric railroad.</u> (呼びかけ)</p> |

*a~g は児童、二重枠は対象児童、太字・斜線は現状や影響や呼びかけを示す部分、枠はデモンストレーションを伴う場面、二重下線は呼びかけにかかわる表現を示す。2013年の〈 〉は通訳。筆者作成

5. 成果と課題

本研究では、2008年度の学習指導要領の総合学習で強調された、言語により分析し、まとめたり、表現する学習を重視し、活動総合学習を核として社会科と外国語活動と連携して地域の課題を外国に伝える活動を位置づけ、思考・判断・表現するESDプログラムを提案した。

アンケート結果や学習成果の伝えたい内容の分析から、ESDの究極目標である行動の変革を促すことにつながる学習者の社会参加の意識が高まったことを明らかにした。さらに、3カ年のプログラムの分析から各年において学習者の社会参加の意識が高まることを示した。

中央教育審議会答申(2016)では、総合学習において、持続可能な社会の視点から教科横断的な学習を充実させていくことが示されている。本研究で提案したESDとしての総合学習を核とした授業プログラムは、次期学習指導要領で目指すべき総合学習の一形態として評価できる。

課題として、遠隔会議において、地域の課題よりも異文化コミュニケーションに児童の意識が向いていた。学習成果である地域の現状や課題を伝えることをより意識させる手立てが必要である。今後、地域の現状や課題をより意識して、学習者が外国へ伝えるようなESD授業プログラムを開発したい。

【付記】

本研究は、科学研究費助成事業基礎研究(C)課題番号23531251「小学校の外国語活動における遠隔会議を活用したESD(持続発展教育)の教材開発」(平成23-26年度、研究代表者 永田成文)の成果報告の一つである。

【註】

- 1) 人々の行動様式や価値観の違いに起因する不和や葛藤をさす。個人レベルではカルチャーショックや人々とのトラブルも含まれる。
- 2) 中山修一「新学習指導要領に入ったESD—『持続可能な社会』の学習」中山修一ほか編『持続可能な社会と地理教育実践』古今書院、2011、p.1
- 3) 田村学『『総合的な学習の時間』の誕生と理念の形成』『せいとか&そうごう』第21号、2014、p.12
- 4) 藤井千春『『総合的な学習の時間』の学習活動は『見えないペタゴジー』か?—各教科への学力の効果を生み出すための総合的な学習の指導・支援の要件—』『せいとか&そうごう』第22号、2015、p.70
- 5) 鳥飼玖美子「小学校英語教育—異文化コミュニケーションの視点から」大津由紀夫編『小学校での英語教育は必要か』慶応義塾大学出版会、2004、p.187
- 6) 授業実践において、どのような手立てを講じれば変革につながるのかを明らかにする必要があるとした。竹内裕一「ESDの態度目標と授業づくりの視点—防災学習の(小学校5年)の授業分析を通して—」井田仁康編『教科教育におけるESDの実践と課題—地理・歴史・公民・社会科—』古今書院、2017、p.200.
- 7) 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議(2006)において、ESDで育成される力として示されている。
- 8) ユネスコ活動のグッドプラクティスとして、気仙沼市立面瀬小学校では米国の小学校と水辺の環境を英語で紹介し合ったり、気仙沼市鹿折小学校では米国の小学校とお互いに同じテーマで探究したことを英語で発表し合っている。
- 9) ユネスコ(2014)が示した3つの領域と15重点分野を参考に、環境領域を自然資源(水・エネルギー・農業・生物多様性)、気候変動、農村開発、持続可能な都市化、防災・減災、3R運動の推進、ごみ分別の促進、公害防止と示している。中山修一ほか編『持続可能な社会をめざす地理ESD授業ガイド』啓文社、2012、pp.25-26
- 10) 放課後に特別授業として日本語を勉強している有料のクラスで、10名ほどが学んでいる。
- 11) 客観式アンケートは3カ年を通して全10の設問があったが、主に自分とのつながりにかかわる項目と主に他地域とのつながりにかかわる項目の社会参加の意識に関わる6つの設問を分析対象とした。
- 12) 各年でアンケートの1回目と2回目の両方とも記述した児童を対象とした。
- 13) 総合学習に積極的に参加し、2015年の遠隔会議で頑張ることとして内容面から記述していたAと、伝える面から記述していたBを分析対象とした。

【参考文献】

- 「国連持続可能な開発のための教育の10年」関係省庁連絡会議「わが国における『国連持続可能な開発のための教育の10年』実施計画」2006
- 小原友行『『思考力・判断力・表現力』をつける 社会科授業づくり』小原友行編『『思考力・判断力・表現力』をつける 社会科授業デザイン 小学校編』明治図書、2009、pp.7-13
- 永田成文「ESDの視点を導入した小学校における異文化理解学習—遠隔会議による国際交流を活用して—」『三重大学国際交流センター紀要』第6号、2011、pp.97-110
- 永田成文『市民性を育成する地理授業の開発—社会的論争問題学習を視点として—』風間書房、2013
- UNESCO, *United Nations Decade of Education for Sustainable Development (2005-2014): Draft International Implementation Scheme, 2004*